

## 手塚治虫作品集―その8 『人間昆虫記』―

萩原 義雄

## 『人間昆虫記』という作品

初出雑誌『ブレイコミック』昭和四五年五月九日号、昭和四六年二月一三日号に掲載された作品である。手塚治虫が少年期から昆虫観察し、虫の絵を多く書き続けてきたことは周知の如くである。この作品題名は、この虫類に目を向けるとき幼虫から蛹、そして蛹から氣鮮やかな羽翅を広げて大空を涼やかに舞う蝶へと変わっていく虫をここに一人の女性曰場かげりこと、十村十枝子として描き出ししている。作品構成は、「春はる・の章」「浮塵うじん子の章」「天牛かみきりの章」「蝨きりぎりすの章」という虫の名で象徴する四章から構成されている。この物語の書き出しは、山浦デザインという事務所デイスクでの二人の男の会話で始まる。雑誌「文藝春秋」に夾まれた附箋紙部分をめぐり、「芥川賞受賞作／人間昆虫記／十村十枝子」という頁に目を馳せ、男は「芥川賞をとった十村十枝子の受賞作だろうか?」「きみ彼女のファンなのかい?」「……、……、……、……」「あの人の小説はすげえよ。男のものかきだつて。ああ、すさまじい男の執念はかけねえな。彼女は実力派だよな」この男が促すことばの鍵が記憶の奥底に眠っている扉を開かせる呪文のように「十村十枝子……」という回想する物憂げな若い男の顔表情が大寫しされ、場面は一転して晴れやかな受賞会場に飛ぶ。「では本年度芥川受賞者十村十枝子さんに受賞のあいさつを」と司会者がヒロインの十村十枝子が鳥瞰圖の左上舞台から登場する。そして、彼女の

受賞挨拶のことばは、「私を今日の栄光にみちびいてくださったのは私をはげましてくださったみなさまのおかげです」「私はまずしい片田舎に生まれつまらない田舎娘として一生を送ったかもしれないなかつたのです」「この栄光を裏切ることなく今後も、いいえ、一生かきつづけたいと思います」と伝えていく。この内容は、当時はテレビのニュース番組のなかで放映されたようだ。テレビから流れる「恒例の芥川賞は今夜プリンスホテルで行われ新進氣鋭の十村十枝子さんが……」の放送を見聞いた中年男（蜂須賀兵六）が呟く。「十村十枝子に乾杯」「世紀の完全変態にカンパイ!」はたまた別の處で首吊り自殺する女性のシルエットが描き出される。そして、受賞会場に彼の回想した男（水野瞭太郎）が現れ、彼女は彼う見て「水野さん!おめずらしいわ……お祝いにきてくださったの?」。男は彼女の眼前に立ち現れて応えて言う。「いいや……、……」「曰場うすばかげりが自殺したよ」「きみは榮譽と地位を手に入れた。その一方でもうひとりの彼女は首をつつた……。これが人生ってもんだ」「テレビにきみの顔がうつつたら首をつつたんだ。下の管理人が見つけてね!」「彼女のアパートに仲間がみんな集まってるよ。くるかい?」「いいえ……、……」「そうだろうな。きみはもう大一線の有名人だ。マスコミの目もうるさいだろうしね」「じゃこれで」「水野さん!!」「あとでお会いできる?」「どうかねえ」という具合である。少し長くなったが、ここまでがこの物語の流れを動かしている必要なプロローグと見たからである。このヒロイン十枝子を巡る人々の運命の絲の流れが凝縮され、彼女の名前は忘れようもないかたちできっちり伝えられていくのである。

**きりぎりす**【蝨きりぎりす・蝨きりぎりす】（鳴き声に基づく語か。スは鳥や虫など飛ぶものという語）①コオロギの古称。古今和歌集雑体）「つづりさせてふー鳴く」②バッタ目キリギリス科の昆虫。体長約35ミリメートル。豊んだ翅の背面は褐色、側面は褐色斑の多い緑色。盛夏、原野に多い。雄は、「ちよんぎいす」と鳴く。ぎす。ぎっちよ。はたおり。莎（さ）の鶏。③秋 ④江戸時代、吉原に通った二挺櫓の屋形船。『広辞苑』第六版）

あくたがわ・しょう【芥川賞】：ガハシヤウ。芥川龍之介記念のため、一九三五年（昭和10）文藝春秋社の設けた文学賞。春秋2回。45年中絶、49年復活。『広辞苑』第六版】

## ヒロイン十村十枝子

### A、青草亀太郎の情報

十村十枝子……彼女の名が、新聞や雑誌をにぎわし始めたのは七年ほど前だ。それは囑望されるアクトレスとしてだった。まだ二十歳前の、牝鹿のような彼女は、所属する劇団「テアトル・クラウ」の若手のナンバーワンだった。それが、おとし、突如として、デザイン分野では国際的な評価を持つ、ニューヨーク・デザイン・アカデミー賞を、あつというまにかっさらってしまった……。マスコミは彼女に「才女」の冠をささげた。それは道楽というにはあまりに芸人じみていた。そして……なんと、去年、手なぐさみにかいたという「群生」に載った処女作「人間昆虫記」が、みごとに芥川賞を射とめてしまうにいたっては……みんなは、驚きをおとりこしてあいた口がふさがらなかったものだ。たかが二十三、四歳の女に、そんなたくさんのちがった分野の才能があつたのだ。マスコミ商売をしていると……、若いくせに売名のためのハッタリだけの人間がワンサと現われる。だが……、十村十枝子は彼らとはちがっていた。彼女はほんものだった。

彼女はつぎつぎにそれまでのベールを惜しげもなくぬぎすてて、新しいイメージに挑戦した。まるで羽化しつづける蝶のように……。青草亀太郎の嫉妬は彼女への興味に変わり、いまでは……彼女にほれていたそうさ。たしかに彼は彼女が好きになっていたのだ。もちろん彼女のうしろだては各界に何

百人もいただろう。しかし名もない三流週刊記者にとつても……、彼女を、万に一つのチャンスがあればものにできる権利があつていいはずだった。とはいえ……、おれには重荷すぎてだめだあ。〔18頁〕21頁〕

### B、蜂須賀兵六の情報

いいか、前に、おれはテアトル・クラウの演出部のチーフだったんだ。彼女——かげりと、最初に出会ったのは地方公演の楽屋でだった。……やぼったい高校生だった。しかし、おれはいいかげんにあしらおうとして……、耳を疑った。彼女は主役のセリフを全部そらんじていたんだ。しかも、配役の西川敬子のくせ、口ぶり、性格そっくりに！。おれは彼女に天分があると思ひ、劇団にさそうと、高校を中退してまで彼女はくいついてきた。「くいついてきた」という表現はびつたりだ。そして彼女は西川敬子にむしやぶりついた。そして……彼女は西川敬子のすべてをすいとってしまったのだ。ものの一年ほどで、かげりは主役にばつてきされた。その演技は西川敬子そのままだった。そして、当の西川敬子はやつれはて、劇団をやめた。いまは消息も不明だ。かげりは模倣の天才だったのだ！。

西川敬子もどきの演技が鼻についてきた頃、彼女は、劇団の古手で演技派の田町泉たまちいずみに目をつけた。おれは、彼女が田町泉に近づいて、彼女にしがみつきしだいに自分の演技を田町泉流に変えていくのをあぜんとして見守った。田町泉は突然スキャンダルを起こして劇団から姿を消した。原因はよくわからないが、妻子のある男と逃げたのだ。そして、かげりは田町泉のあとにすすわった。すでに、かげりは……、西川から田町へ脱皮していたんだ。完全な変態だ。幼虫が皮をぬぎ捨てるたびに変身するように……。彼女は、そうやってつぎつぎに劇団のメンバーを喰っていったんだ。「教えて」。自分のものは、ひとつもない。全部、他人からすいとった借りものだ。しかし……それなりに完全無欠なものなのだ。彼女はつぎつぎにそれまでのベールを惜しげもなくぬぎ捨てた。羽化しつづける蝶





①から⑩の笑いの表現者は、十村十枝子であり、⑪だけが彼の夫となった男の笑い方である。

十村十枝子は、実に感情豊かな女性として、この笑いの表現にも多種多様な笑いを見せていて、その笑いの有する奥深さをここに見事に描き出してきている。

⑪の「ハーハーハハハ ハハハハハ」の笑いには、男の勝ち誇った聲の響きが投影されている。

手書きの表現

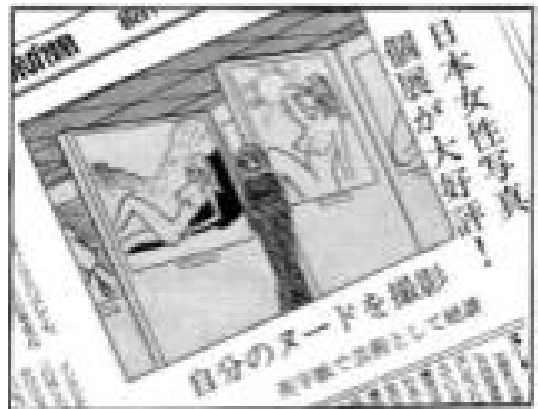


※原稿用紙の柵目にペン書きで記載する。内容は、

芥川受賞者十村十枝子の第二作は現在猛意執筆中  
容はおそらく前作にまさの多才な新鋭は各方面から  
ンシヨンにこもって構想を練ってと、風景面にダブらせて表記する。

出版用語の表現

入広（新聞などに広告を入れること）するんだからタイトルぐらい教えてもらえませんか？（102頁）



新聞記事の嵌め込み式手書きの手法は実に用意周到であることを感じさせてくれる。実際の新聞記事容の本文に見出し語の固有名詞が手書きで描写されているからだ。虫眼鏡という拡大鏡で覗いても遜色のない記事文がここにはある。

昆虫の中で、ほかの虫にそっくりのものがあるでしょう。たとえば蜂にそっくりに似せた蛇だとか、毒蝶に似せた無毒の蝶とか、中にはフクロウそっくりに似た蝶もあるそうです。これらは生まれつき、それらに似せることで、身を守るを知っているのですよ……。

彼女がテアトル・クラウで役者の勉強をしたことは彼女にとつてたいへんなプラスでした。彼女はよそおって相手になりきる術をおぼえたのです。身なりだけでなく、心や能力まで！〔322頁〜323頁〕

〈研究課題〉

ふくろう【梟】の顔を盗んだ蝶のように……

こうした自然生物である昆虫の観察から得た智識を手塚治虫は、自ら精巧な観察図絵とその説明文を用いて表現することのできる博物学的な研究者であり、作中に描き出したヒロイン十村十枝子こと白場かげりにこれをそのまま輻輳させていく。此の場面を創り出すことで漫画家手塚治虫がここに存在するといつても過言では無かるう。もし、あなたが漫画家であつたら、どのような輻輳を試みる事ができますか？ この影響を受けた漫画家に迫ってみよう！